

日本における白居易の研究——二〇二〇・二〇二一年——

諸田龍美

はじめに

拙文は「日本における白居易の研究」のうち、二〇二〇年・二〇二一年の「白居易・白氏文集」に関する研究を紹介することを目的とする。すなわち、『白居易研究講座第七巻 日本における白居易の研究』（勉誠社、九八・八）の「戦後日本における白居易の研究——白居易・白氏文集に関する研究——」及び『白居易研究年報』創刊号〜二〇号で、それを継承してなされてきた仕事を、引き続き二〇二〇年・二〇二一年の研究を対象として行ったものである。

今回対象とする研究は、CZJに掲載する二〇二〇年・二〇二一年の、白居易・『白氏文集』に関わる論著を対象とした。文献の配列等、凡例事項は従来のもを継承している。また、CZJに「抄録」がある場合は、それをそのまま掲出した。

一の二 白居易研究の整理紹介

下定雅弘 『日本国内白居易研究文献解題目録』 (『白居易研究年報』二〇、二〇・九)

一九九八年以後、二〇一九年まで、ほぼ二〇年間の「日本における白居易の研究(受容研究を含む)」の概要を紹介するもの。構成は「はじめに」/【凡例】/日本における白居易研究文献解題——一九九八年以後——目次/日本における白居易受容研究文献解題——一九九八年以後——目次/日本における白居易受容研究文献解題——一九九八年以後——(解題) /日本における白居易受容研究文献解題——一九九八年以後——(解題)。

【書評】大淵貴之 「議論を促す新説の提起 陳翀著 『宋漢籍交流史の諸相——文選と史記、そして白氏文集』」 (『新・日中文化交流史叢書、大樟樹出版社、二〇一九年六月』) (『白居易研究年報』二〇、二〇・九)

王勇氏主編「新・日中文化交流史叢書」第一期全十巻中の一書として刊行された本書への書評。各章の内容を紹介し、評者の見解も示した上で、議論を促すもの。以下のように述べる。「陳翀氏著書は、宋代中国と平安時代中期以降及び鎌倉時代の日本との間に存在した漢籍交流の論考を中心とし、数篇の関連する論考を附す。附論を含む全ての論考が、いわゆる通説に対し学術的批判を展開して独自の見解を示したものであり、挑戦的かつ刺激に溢れた印象を持つ。評者が見るに、著者の意図は徒に新説を提起することにはなく、重要な各論点について日中の文学研究、歴史研究に携わる多くの研究者に議論を促すことにある。」

【書評】甲斐雄一 「神鷹徳治著 『白氏文集諸本の系譜』」 (『新・日中文化交流史叢書、大樟樹出版社、二〇一九年六月』) (『白居易研究年報』二〇、二〇・九)

王勇氏主編「新・日中文化交流史叢書」第一期全十巻中の一書として刊行された本書への書評。各章の内容を紹介し、評者の見解を記すもの。以下のように述べる。「本書の一篇一篇は、個別の資料を丹念に調査し、そこ

に見出される白居易の詩文について、諸テキストを突き合わせ、分析を加える着実な作業を基礎に紡ぎ出されたものである。その精緻な考察が導き出そうとする結論を、敢えて単純な図式にすれば、「この白居易詩文の本文は、旧鈔本系テキストなのか、刊本系テキストなのか」ということになるであろう。」「著者の微に入り細を穿つ調査は、そもそもの源流を異にする単行での通行本が、現存の刊本系テキストに流れ込んでいる可能性をあまり出している。今後、さらに唐鈔本の原貌に光を当て、精緻な考察が世に問われることを期待するものである。」

下定雅弘 「特集・終刊に寄せて」 (『白居易研究年報』二〇、二〇・九)

本号の特集を組んだ背景と意義、及び「年報」二〇年の総括と今後の課題・抱負について述べたもの。「特集に寄せて」にいう。「本号は「歌舞音曲」特集とした。音楽は、詩と共に、白居易の生命そのものだった。この分野での研究がさらに発展することを願って、この特集を組んだ。特集稿は六篇。」各論の内容を紹介したうえで、「特集としては、もつと多くの論考の収載を企図していたが、いささか及ばなかった。とはいえ、舞表現についての研究が今後大きく発展することが望まれることを含め、音楽についての研究が、まだまだ無尽蔵の課題をもっていることを示す役割は果たせたのではないだろうか。」

「終刊に寄せて」にいう。「年報」の発刊は、『白居易研究講座』全七巻を受けての、新たな出発だった。……年報が、『講座』の仕事を受け継いで果たした役割の最も大きなものは、「研究の整理紹介」の分野である。「創刊号に、太田次男氏を書いておられる「年報」のアイデンティティー」のうち、「白氏研究進展の実態を調査・検討することによる現状把握の作業」という点では、……堅実にその作業を遂行してきた。」「だが、現状把握の作業を踏まえて「各分野の個々の問題点の研究が、全体として調和の取れた形で進められるよう、いわば、一つの指標を提供」するという点では、……研究の全体を見るにまだまだばらつきがある。」「詩の諸問題及び校勘の

分野については、質量共に明らかに大きな進展があった。しかし、文の分野での研究は、未着手の領域が余りに大きい。今後は「一、毎年の研究動向を、勉強出版のFB上で、お伝えする。」「二、日中での白居易の広がりを通史的に、また文学・歴史・美術をまたいで描き出すような企画を立てたい。」

【書評】栗山雅央「文艶蓉著『白居易詩文在日本的流传与受容』」（中國學研究論集「三九、二一・四）

文艶蓉氏の当該書（中州古籍出版社、二〇一七・九）への書評。各章の内容を紹介し、「評者なりに気づいた点」も示す。以下のように述べる。「本書は、全十六章で構成され、前半三章では白居易の詩文が日本へ「流传」した過程やその際の形態、或いは主要なテキストの学術的価値などに着目して考察を展開する。また、後半三章では平安時代から江戸時代にかけての白居易詩文の「受容」について全体を概括するとともに、漢文学と和文学に弁別して具体的に考察する。」「本書は確かな資料性を備えた良質な研究成果であり、本書を基盤とすることで白居易研究の深化が望めるであろう」。

二の二 本文の校勘

【研究ノート】神鷹徳治「巻三・四「新楽府」五十篇——旧鈔本から刊本への位相の変化」（白居易研究年報「二〇、二〇・九）

構成は「はじめに／旧鈔本と刊本」。

「テキストとしては、完成されていたと云われていた宋刊本に、写本から版本になる過程において、予期以上の本文の改変ないし誤刻が行われていたのではなからうかという推測が生じている。」と述べた上で、以下のようという。「一、太田次男博士・小林芳規博士共編『神田本 白氏文集の研究』（一九八二、勉誠社）」「二、岡村繁博士『白氏文集』第一冊、（新釈漢文大系、二〇一七、明治書院）」「三、高木正一『白居易 上』（中国詩人選集 第二二

卷、一九七三、岩波書店）」の「三本を手にとることによって」、「巻三・四の「新楽府」五十篇の本文が旧鈔本から、刊本へ変化する移相を、読みとることが出来るのではないだろうか。」

【研究レポート】後藤昭雄「白居易「論友詩」の本文」（成城国文学「三七、二一・三）

天野山金剛寺所蔵の『文集抄』に抄出されている「論友詩」（『白氏文集』巻二）の本文には他の諸本にはない独自の本文が含まれており、それについて考察するもの。最後に以下のようにいう。「天野山金剛寺蔵『文集抄』は白居易の「論友詩」（『白氏文集』巻二）を遺存する唯一の古写本である。いわゆる旧鈔本の本文は本書にのみ残されている。そこで、これを現行のテキストと対校してみると、二箇所に独自異文があるが、とりわけ第21句「朱門に董賢有り」の「董賢」の本文は注目される。現行のテキストの本文は「勳貴」あるいは「勳賢」であるが、これら一般の熟語に対して「董賢」は人名である。そうして、このことよって、次の句との対偶はよりの確なものとなる。現行本の「朱門有勳貴（勳賢）」——「陋巷有顔回」によっても、この一聯が対句であることは明白である。作者がここを対句とすることを意図したのであれば、「董賢」——「顔回」という人名を対語に置いた完整の対句こそが本来の姿であったのではないだろうか。」

三の二の二 諷諭詩

山崎藍「白居易新楽府「井底引銀瓶 止淫奔也」に詠われる「瓶沈簪折」について——唐詩に垣間見える術数文化」（『アジア遊学』「二四四、二〇・二）

「正式な手続きを経ずに結婚した男女の恋愛は危ういものであると警鐘を鳴らす白居易の新楽府「井底引銀瓶 止淫奔也」の冒頭に、釣瓶が落ちかんざしが折れるのは愛する人との別れに似ている、と詠われている。この「瓶落簪折」にはどのような寓意が込められているのか。經典や詩歌、術数に関する文献などの記載を通し

て考え」たもの。構成は「一、井底引銀瓶 止淫奔也」とは／二、經典・術数文献などに描かれる井戸と釣瓶 かんざし／三、詩歌における井戸とかんざし——『詩経』から六朝詩まで（一）井戸と釣瓶が詠われる詩歌（二）『詩経』や古楽府に詠われるかんざし詩（三）梁代のかんざし詩／四、詩歌における井戸とかんざし——唐詩（一）瓶と轆轤が含む寓意（二）井戸とかんざしの融合——戴叔倫「相思曲」と白居易「井底引銀瓶」。結論としてこう述べる。「魂の依り代となる瓶は井戸繩に繋がっており、井戸繩が切れることで決定的な断絶へと誘われていた。また、かんざしが壊れたり落ちたりすることは不吉であるとされ、特に女性の身に起こる不幸を暗示していた。「井底引銀瓶」の「瓶落簪折」は、主人公の今の絶望とこれから起こる運命の危うさを表現するものとして詠われているのである。」

山田尚子「悲嘆と諷諭——「古詩十九首」と「新楽府」」（『成城國文學論集』四三、二二・三）

「新楽府」序に見える「古詩十九首」への言及を起点として、「新楽府」において、悲哀の感情を詠ずることと諷諭詩であることが結びつく、その結びつきについて考察するもの。構成は「はじめに／一、新楽府序の本文——「古詩十九首」への言及——／二、「古詩十九首」注釈における諷諭的解釈／三、悲嘆から諷諭へ／四、「新楽府」における悲嘆と諷諭／おわりに」。

以下のようにいう。「本稿では、新楽府序の「首句標其目、古十九首之例」の記述を起点として、「古詩十九首」が『文選』注釈、特に五臣注において諷諭的に解釈される点について考察し、さらにそうした「古詩十九首」の諷諭的な解釈が詩の本文に表出された悲嘆を解釈することで成されるものであることを確認した。また、悲嘆の表出から諷諭的な解釈へと帰着していく道程が、「新楽府」において作品を展開させるための手法として取り入れられている可能性を指摘した。」

竹村則行「王昭君の故郷帰州で詠んだ白居易の「青塚」詩」（『中国文学論集』五〇、二一・二二）

白居易が忠州刺史に榮転する途中、王昭君の故郷帰州訪問の際に詠んだ「青塚」0122詩について、帰州には墳墓「青塚」はないのに、なぜこの詩を「青塚」と題して諷諭詩を詠んだのか、その経緯について従来説を再検討し、併せて、晩年の杜甫が同地で詠んだ「詠懷古跡五首（王昭君）」詩を取り上げ、「両者の詩人としての質的な差異についても言及」したものの。構成は「一 はじめに／二 白居易が帰州で詠んだ「過昭君村」と「青塚」詩／三 李白と杜甫の「青塚」詩／四 諷諭詩としての白居易「青塚」／五 まとめ——帰郷絶望の杜甫と前途洋々の白居易が帰州で詠んだ王昭君詩の質的相違」。

以下のようにいう。「詩題を「青塚」とした所以は、尊崇する李白・杜甫を始め、盛唐中唐時代に一種の流行語であった用語を諷諭詩の詩題に冠したと考えるのがより妥当。「諷諭」詩に組み込む理由は」「白居易自身の苦い体験から生まれた」次のような「貴重な垂訓」であったから。「宮女に憧れる美女に忠告するが、君恩はいつ疎遠になるか分からない薄情なものだ。美貌に自信があった王昭君は……結局天子に誤認されて匈奴に嫁ぐ不幸を招いた。……未来の宮女たちよ、見かけの美貌に頼り過ぎないことだ。」

杜甫の「王昭君詩」には、通常観光の感懐詩でなく、彼女の不幸な歴史に自らの境遇を重ねて一体化した杜甫の帰郷への願望と心痛が切実に吐露されている。白居易の詩には「王昭君を自分とは遠く離れた古代の一地方美人として客観視する白居易の冷静な観点がある。」「このことは……所謂社会詩全体についても……基本的に同様である。」「この差異は、……安祿山の乱後、失職して長安を後にし、中国西北部を流浪して正に辛酸の渦中にある浪人杜甫と、貶謫は経験しても……社会批判と長安復帰が国家によって保証されている白居易との、当時の立場環境の雲泥の差に起因する。」「憂苦を常態とする杜甫と、文字通り常に楽天的な白居易の人格の相違がその根底にあるのは言うまでもない。」

三の一の三の一 長恨歌

勝見菜「白居易詩研究——「長恨歌」とその周辺」(日本文學 一一六、二〇・三)

「長恨歌」について、その主題や、詩の中で描かれている玄宗と楊貴妃の心の動き、末尾における両者の隔絶について論じるもの。構成は「はじめに／序章「長恨歌」の主題とその批評／第一章「長恨歌」と陳鴻「長恨歌伝」との比較／第一節「長恨歌伝」作成の背景とその作意／第二節「長恨歌」の「長恨歌伝」との異同 一、玄宗 二、楊貴妃 三、周囲の人々／第二章「李夫人」との比較／第一節「李夫人」の主旨／第二節「長恨歌」から見る「李夫人」／第三章「長恨歌」の主題／第一節「長恨歌」主題の解釈／第二節 後段における玄宗と楊貴妃の隔絶」。

最後の「隔絶」について、こう述べる。「在天願作比翼鳥、在地願為連理枝」は玉妃(仙界の存在となつてからの楊貴妃)の心情を強く表した二句である。……ここで玉妃は、この世では死に別れてしまったが、また別の世で結ばれようという未来への希望を述べている。「その一方で……玄宗は……「天長地久有時尽、此恨綿綿無絶期」と「この「恨」の情念は永遠に残り続けると述べ」る。「玄宗の愛は今後永遠に成就しないものであることを強調しており、それがこの詩の悲劇性を際立たせている。「今生の別れを悲しみつつも未来への希望を述べた玉妃の言葉と、永久に続く悲しみを述べた玄宗の言葉には、隔絶があることは明らか」。「その理由は、玉妃は仙界に旅立つた死者であり、玄宗はこの世に残された生者であるということにある」。「生者が迷妄の中で、この世で愛し合うことに捕らわれ惑うのに対し、死者である玉妃が持つ愛は、現世に捕らわれることなく、生きた人間には逃れられぬ感いから超越した愛なのである」。「死者である玉妃と生者である玄宗とは、その生死の差に基づいて、大きな隔絶が存在してしまつてゐるのだと考える」。

三の一の四 律詩・絶句

水谷誠「白居易律詩類型とその影響」(中国詩文論叢 三九、二〇・二二)

「白居易の近体詩が類型的に感じるのはどうしてなのか。」これまでの考察を元に、「韻字(を含む)三字の組を「韻字ユニット」と呼」び、その分析を通して「白居易律詩の類型化について考え」るもの。構成は「一、前書き／二、三字全同の「韻字ユニット」／三、韻字以外の「韻字ユニット」を考察／四、律詩での相似「韻字ユニット」はどうなつてゐるのか／五、孟郊での独自「韻字ユニット」／六、賈島での独自「韻字ユニット」／七、結語」。

「結語」にいう。「これまで白居易律詩の類型化の条件を追い求めてきた。そして、その重要部分が「韻字ユニット」であることを指摘した。」「結語として、「韻字ユニット」の独自性はどれほど重要なのか、という点に触れないわけにはゆかない。杜甫や白居易での優れた作品では、「韻字ユニット」の独自性が際立っていることがわかった。しかし、そのために苦吟派の窮屈な独自性は、かえって逆効果になっていることも見て取れた。近似「韻字ユニット」と独自「韻字ユニット」をそれぞれ上手に混ぜ合わせたところに、よい作品群がありそうな気がする。」「解は中庸にありという平凡な結論になつたようなので、ここで擱筆しよう。」「

水谷誠「白居易律詩対偶論」(中国詩文論叢 四十、二一・二二)

「白居易の近体詩が類型的に感じるのはどうしてなのか。」この問題について、律詩において「韻字ユニット」(前項参照)と「対偶」を構成する「奇数句(対偶上句)の非韻字となる「三字群」に「光を当てて、考察する」もの。構成は「一／二／三／四／五／六／七」。

「五言・七言の定型律詩について、頷聯・頸聯での上の句末字について、すべてを調査した」上で、表一「白

居易対偶上句末字表」、表二「杜甫対偶上句末字表」を提示。一例として、「六」及び「七」にいう。「さて、こうして得られた韻字ユニットあるいはそれと並ぶ「三字群」内での「如」の対となるのが何であるのか、という点に注目して見ると、白居易三八例中、二二例が「似」である。一方、杜甫は、一九例中三例にとどまる。「白居易は」機械的な使用であるといえる。「杜甫の場合、こうした安直な置き換えと捉えられないように、慎重に言葉の配置をしていることが見て取れる。現在残る唐代作品の中で、最多を誇る白居易であるが、多作をするための手段が、以上見てきたような機械的に処理することであるとするとするならば、彼のいう「詩魔」に一種の興ざめを覚えてしまう。ただこうしたことは、白居易だけではなく、現代の作家にも通じる問題であるので、彼一人をあげつらうつもりでは決してないことを付言しておく。」「今後、本論が、内容面だけでなく、形式面で律詩をもう少し深く見ることができるときの導入となれば幸いである。」

三の一の五 詩論・四分類

盧旭「詩集十五巻から『白氏長慶集』の詩巻へ——白居易と元稹の編集理念の違い」（『日本中國學會報』七三、二二）元和十年の詩集十五巻と長慶四年の『白氏長慶集』五十巻の編集に関して、元稹がどの程度かわっていたか、その文学的意義を含めて、明らかにしようとするもの。構成は「一、はじめに／二、白居易による作品整理二（一）詩集十五巻 二（二）江州時代の詩作の整理 二（三）元和十四年から長慶四年までの詩作の整理／三、元稹による編集作業 三（一）四分類の維持 三（二）元稹の形式美追求／四、終わりに」。

まず「本稿の目的」についていう。『白氏長慶集』（『前集』）の詩巻を手がかりにして、詩集十五巻成立以後の白居易自身による詩作整理、および『白氏長慶集』に対して元稹が行った編集作業の実態を詳しく検討し、そこにあらわれた両者の編集理念の違いを明らかにすることである。」

結論として、以下のように述べる。「元稹が長慶年間までに入手したのは、白居易自編の詩集十五巻本をもとに整理した詩集、および元和十三（八一八）年以後の詩体別の詩巻である。元稹は『白氏長慶集』の編集に際し、さまざまな要素を考慮しながら、四分類を維持しようとした。」「元稹は巻数、各巻の紙幅や作品数をなるべく均等にするために、詩の配列を調整したり、一部の詩巻を分割したり、分割したものを合併したりした。現在、我々が確認できる『白氏長慶集』の詩巻は、このような元稹の関与を経て完成されたものなのである。整った数字や均等性といった形式美の追求こそが元稹の編集理念の根幹にはかならない。」

三の五の二の一 健康・病気等

埋田重夫「白居易の詠老詩」（『中國文學研究』四六、二〇・一一）

「白居易詩の詠老表現に着目し、題材や伝記に即した詠法の特徴と傾向について、個別的に考察を加え」、「その衰老の文学が詩人論として如何なる意味を示すのか」、「確認できた複数の要点を提示」するもの。構成は「（一）序／（二）先行文献の指摘／（三）各種題材と衰老表現／（四）詠老詩の特徴と傾向／（五）結語」。

特に「（四）詠老詩の特徴と傾向」にいう。「詩題に老の字を含み、一首全体が衰老を叙述する狭義の詠老詩は、合計二十三首に達している。」「通覧して第一に指摘できるのは、白氏の詠老詩が六十歳を境にして急激に増加している事実である。」「伝記的にみて詠老詩の制作状況は、四十代に体験した下邳丁憂と江州貶謫から始まり、風痺の発作があった六十代に頂点を迎え、七十五歳で亡くなる直前まで途絶することなく続いていた。」「第二の論点、そこで説かれる詩想が年齢とともに大きく変質していることである。」「下邳・江州」「この両時期の衰老表現には、老いを嫌い、老いに抗い、老いから逃れんとする詩情が強く認められる。」「しかし、「大和六年六十一歳になった七言絶句「任老」〔2791〕「以後は、老いは徐々に白居易にとって近しい存在として引き寄せられてゆく。」

「第三に言及すべきは、白居易最晩年における酒と詩の意義である。」「六十七歳の時に」「醉吟先生伝」〔2933〕の大作が執筆されていることは、極めて注視に値する。「醉」と「吟」という営為は、結果として白居易に七十五歳という長寿を付与し、その人生を充実させるために作用した」。

〔五〕「結語」にいう。「白居易は肖像画や鏡を見詰め、絶えず老いと向き合い、そして自らの衰貌病態さえも詩材にしている。中国文学における詠老詩は、白居易の登場によって新たな地平へと押し上げられたと考えてよい。その背景には彼が誰にも増して、自他の身体に強い関心を寄せていた事実を指摘しなければならぬ。」「また彼が老いを深めるに従って悲老・嘆老・畏老から脱却して、喜老・任老・逸老の境地にまで到達できたのは、人が生きていくための意味や価値を紡ぎ出す閑適詩を、この詩人が創造し所有していたからに他ならない。」「七十五歳の折、死の直前に作られた最後の詠老詩」「自詠老身、示諸家属」〔364〕詩の「最終句にある「把背向陽眠」は、七十五年の天寿を思い残すことなく生きた老人の、理想とする終焉の姿であった。」「白居易を人生の達人と定める理由である。」

埋田重夫「白居易の詠死詩」(中国文学研究) 四七、二一・二二

『白氏文集』に現れる夥しい死の描写は、彼が文字通り死生の詩人であることを傍証している。生まれた者は必ず死なねばならない。この厳然たる事実に対して、白居易が自己の感情をどのように表出しているのかを探ることは、作家研究において「避けて通れない課題」であり、「それはまた白居易にとって感傷詩が如何なる存在であったかを解明することにも繋がっている。」構成は、「(一)序／(二)詠死詩の先駆け／(三)白居易詠死詩と三つの観点／(四)白居易詠死詩の諸相／(五)結語」。

〔四〕にいう。「母親の死去に伴う服喪のため、居易が渭村下邳に退居していた期間は、元和六年(八一)の孟夏から元和九年の季冬までの三年七ヶ月である。」「彼にとって下邳は、死を絶え間なく凝視する空間であり、

死者達と限りなく隣接する境界であり、そしてまた過去の追憶により多く連なる領域であったと思われる。この地で作られた死を詠う作品——感傷詩および雑律——は十四首を数えるが、その何れもが特筆すべき特色を兼ね備えている。この数年間に詠じられた詩篇は、白居易における死生の文学のいわば原型を形作っていると言ってもよい。」「結語」にいう。「白居易にとって感傷詩(古体・近体)は、純粹な抒情詩として必須不可欠な題材であり、「取り上げられる様々な主題のなかでも特に死別離は、感傷詩の本質に連なっており、多情多感な白居易文学の根幹をなしている。」「その極点に元稹がいたことはとりわけ注意されてよい。元稹の死は確かに、白居易の詠死詩——死生観——に大きな画期を齎したのである。」「総じて白居易詠死詩は、元稹の死を集中的に詠う近体の感傷詩の登場によって、その最後の機能を果たしたと言える。」

三の五の二の二 飲食への嗜好

下定雅弘「杜甫、そして白居易へ——「醒」の快適」(杜甫研究年報) 四、二一・二二

「醒」は、詩文において、古来、孤高または悲哀寂寞の感情を表すが用例の中心だった。だが、杜甫の詩において快適と結びつく「醒」が登場する。そして白居易がこれを継承して、多くの快適・飲娯に結びつく「醒」を展開した」と論ずるもの。ただし、「白居易のそれについては簡潔に述べるに留める」と。構成は「はじめに

／一 杜甫より前の「醒」／一の一 先秦漢魏南北朝の「醒」(一)『楚辞』の醒／(二)生理現象としての醒／(三)快適な「醒」の萌芽／(四)その他の醒(酔復醒)／一の二 唐に入ってから醒(一)『楚辞』の「醒」、悲哀・寂寞の「醒」／(二)生理現象としての醒／(三)快適の「醒」／(四)その他の醒(酔復醒)他」／二 杜甫の「醒」(一)悲哀の醒／(二)生理現象としての醒／(三)快適・飲娯の「醒」／(四)その他の醒(酔復醒)／三 白居易の「醒」(一)悲哀の「醒」／(二)生理現象としての醒／(三)快適の「醒」／(四)そ

の他の醒（醒選醉）／まとめに代えて」。

白居易について、以下のようにいう。「白居易は、杜甫の快適の「醒」を我がものとし、多くの快適・歓娛の「醒」を詠じた。杜甫の後、白居易の前代までの詩人に、杜甫を継承する快適の「醒」は見られない。それを自覚的に継承し、発展させたのは白居易である。白居易が日常生活に生起するあらゆる事象と感情とを詠じていることについては、膨大な研究が蓄積されている。白居易における「醒」も、その詩作の姿勢と方法の一齣である。杜甫は、盛唐の詩人であると同時に、中唐詩の先駆者である。小稿は、その見方に新たに一つの証左を加えたものと思う。」

三の五の七の三 音楽性

【紹介】森岡ゆかり・下定雅弘「楊宗瑩著『白居易の愛好——音楽』」（『白居易研究年報』二〇、二〇・九）

楊宗瑩氏の論文「白居易的愛好——音楽」（台湾師範大学国文学系「国文学報」一二、一九八二・六）の内容について、その後収録された同氏著『白居易研究』（文津出版社、一九八五・三、「第四章 生活芸術」）の本文に基づき紹介するもの。構成は「はじめに／一 七弦を益友と為す／二 両耳が知音／三 歌を聴き舞いを観る／四 詩中の楽器／五 詩中の楽器」。

谷口高志「白居易の音楽愛好——詩文に語られる感性と嗜好」（『白居易研究年報』二〇、二〇・九）

「音楽（ないしはそれに類する音）を扱った白居易の詩文」において「自身の愛好がどのように捉えられているか」「特に自らの感性や嗜好に関わる言及に留意」しながら検討するもの。構成は「はじめに——愛好を語る白居易／一 演奏と吟誦／二 社交と競争／三 選択と偏愛／小結」。

以下のようにいう。「自分に合った楽しみ方を見つけ、それを詩に詠出すること、これは日々の生活や感興に照らしつつ、自分固有の性向をその都度確認し、規定しなおすことでもある。音楽の楽しみは、中唐の白居易に至って、自らの固有性（自分らしさ）を精密に表現する具として、高度に磨き上げられることとなった。」「そうした彼の営為は、後世における文人趣味、即ち生活スタイルそのものの芸術化を図る志向の先駆けとして、極めて大きな意味を持つ。白居易にとっては、いうならば日常生活の営みそのものが、自己表現の舞台であり、創造の場だったのであり、彼の文学の特徴の一つである日常への関心とは、何気ない日常を、自分の色に染め上げていく喜びと一体のものであった、と考えられる。」「音楽の愛好は、酒への耽溺や怪石趣味などと結びつき、更に複雑な生活スタイルのあやを織りなしていく。」「その他の趣味・嗜好の営みの検討については、今後の課題としたい。」

中木愛「戦後日本における白居易の研究（白居易・白氏文集に関する研究）——二〇一八」（『白居易研究年報』二〇・九）

二〇一八年の白居易及び白氏文集、その作品に関する十七点についての研究を対象として、それぞれの概要を紹介するもの。

中純子「霓裳羽衣曲の幻——唐・宋音楽をむすぶ架け橋としての白居易」（『白居易研究年報』二〇、二〇・九）

「安史の乱によって断絶した宮廷音楽のなかにあった霓裳羽衣曲が、白居易の筆力によって、中唐以降においていかに再生されていったか」について考察するもの。構成は「はじめに」／一 白居易「長恨歌」以前の霓裳羽衣曲／二 憲宗の宮廷音楽と白居易／三 中晩唐の文壇と霓裳羽衣曲／四 江州司馬左遷期の白居易と霓裳羽衣曲／五 白居易「霓裳羽衣曲」／六 五代・宋の宮廷の霓裳羽衣曲／七 白詩を追って／結語」。

「結語」にいう。「玄宗皇帝の宮廷で奏されていた霓裳羽衣曲は、四〇〇年以上の時を経てなお、南宋の姜夔によって復元が試みられた。さらにそれを現代の研究者が復元しようと試みている。」「そのように命脈を保ったのは、ひとえに白居易の詩によるところが大きいと言えそうである。白居易は玄宗期から半世紀の後、巷間に伝わっていた霓裳羽衣曲を、「長恨歌」に刻むことによって、玄宗と楊貴妃の悲恋を美しく想起させる曲と位置づ

けた。そして憲宗に取り立てられた彼は、新進官僚として新楽府「法曲歌」で、霓裳羽衣曲を胡楽ではなく開元治世の音楽とした。この定義づけによって、中華の音として霓裳羽衣曲が後々まで宮廷で奏されることになったのである。その後、地方へと左遷された白居易の筆は、霓裳羽衣曲を玄宗に結びつけることよりも、「琵琶引」や「小童の薛陽陶が鶯栗を吹く歌」の制作と同じように、音楽を眼前に髣髴とさせるように描くことへと向かった。それによって完成された「霓裳羽衣歌」によって、後世のものは霓裳羽衣曲の情調とともに構造や楽器構成なども知ることができるようになったのである。それを手懸りとして、五代・宋の文人たちは霓裳羽衣曲の姿を懸念に追おうとした。」

下定雅弘「戦後日本における白居易の歌舞音曲に関する研究（解題）」（『白居易研究年報』二〇、二〇・九）

戦後日本における白居易の歌舞音曲に関する研究の概要を記すもの。構成は「はじめに」／一 白居易の音楽表現に関する研究／二 白居易の音楽研究が日本文学に与えた影響に関する研究／「歌舞音曲の研究」の著者・論題の一覧表。

「はじめに」で以下のようにいう。「白居易の作品の音楽表現についての研究は、戦前、遠藤實夫の「霓裳羽衣曲」論や石田幹之助の「胡旋舞」についての研究があったが、ごく僅かである。戦後も、一九八〇年代、太田次男により、琵琶行の音楽性に注目すべきことが述べられる、九〇年代末に、丹羽博之が、白居易の音楽好きを概括的に論じる等のことはあったが、散発的なものである。だが、一九九〇年代に入ってから、この方面の研究は一挙に活気づき、系統的な研究がなされ始めた。その成果は実に大きい。それは、主として、山本敏雄・中純子・木愛・谷口高志による。山本敏雄は、作品中に現れる楽器に即しつつ、その表現の特徴を論じている。中純子は、白居易の作品の音楽性を唐代の詩と音楽という大きなフィールドの中において、白居易の音楽の個性、またそれが周辺に、宋代にまで及ぼした影響について、陸続と論を発表し続けている。二〇〇〇年代に入ってから、中木愛は、

その音楽表現の性質につき、自然物を用いた比喻から、音を的確に表す様々な物と事柄への探索と、白居易の表現の広がりや深まりを論じている。谷口高志は、白居易の多種多様な愛好の中のものとして音楽を位置づけ、音楽表現における白の感性・感覚と言語化等の関係を探求している。作品に即して見れば、「霓裳羽衣曲」「霓裳羽衣歌」に関する研究と、「琵琶引」の音楽性に関する研究がまとまりを見せている。舞についての研究は、始まった所といていい。潘怡良の白詩が菅原道真に与えた影響に関する研究、山崎藍の舞表現における「かんざし」「汗」の形象の研究が目される。日本文学においても、『源氏物語』における「胡旋女」「聽幽蘭」「琵琶引」「楊柳枝」の撰取、和歌における「五絃弾」、能における「李夫人」等の撰取が論じられている。今後、中国文学と日本文学の両分野での研究が刺激し合って、白居易の歌舞音曲、その音楽性についての研究がさらに着実に発展することが期待される。」

五 思想の研究 五の三 その他

谷口高志「唐代文人と辺地の神——白居易の祝文を中心に」（『佐賀大國語教育』五、二一・二二）

「唐代の祝文、特に中唐・白居易の祝文を取りあげ、地方に赴任した文人が、当地の神靈にどのような態度で接したのか、また官と神の関係をめぐって、いかなる意識や観念が語られ、どのような感情が表出されることになったのか」について考察したもの。構成は「はじめに」／一 祝文制作の背景——唐代の地方官と祭祀／二 神への叱責——白居易の二つの祝文／三 神への攻撃——唐代における官と神の関係／小結。

以下のようにいう。「中唐の文人たちは、地方の祭祀に深く関わり、災害が起これば祠廟へと奔走して、熱心に神事に取り組んだ。しかし、そうした勤勉な祭祀活動がなされる一方で、王権の代行者たる彼ら官吏と、民の信仰を集める神靈とは、常に微妙な緊張関係にあった。地方官は民の教化を司る者として、土地の神靈に対抗心

や反発心を抱いていたと想像され、そうした公的感情が、白居易の祝文のなかには色濃く反映されている。「職は神と同じ」と明言した彼は、〈官の神格化〉や〈神の官僚化〉といった近世的な観念を、おそらく初めて意識的に唱えた知識人であったが、彼のそうした観念を根底で支えていたのは、何よりも官吏としての矜持であり、神靈に対する対抗意識であったと考えられる。そして、そうした彼の意識や感情は、唐代における〈淫祠〉への攻撃的態度とも連動したものであり、他の文人たちにも少なからず共有されていたように思われる。」

六の二 出自・家族

和田浩平「白居易の母について」（学習院女子大学紀要）二二三、二二・三

白居易が父季庚と母陳氏の事績を記した「襄州別駕白府君事状」をもとに、「白居易の母について整理し、理解を深め」、「白居易の心情を探」ろうとするもの。構成は「はじめに／一「襄州別駕白府君事状」／二 母陳氏について（一）娘時期（二）嫁時期（三）母時期／三 白居易の思い／おわりに」。

「事状」後半の母陳氏の部分に関して、本文を九つに分け、注釈・和訳・解説を施す。そのうえで、以下のよう述べる。

安史の乱が始まった天宝十四載に生まれた母は、「父陳潤を失うまで、八年間を、激動の中で過ごした」。「母が一人っ子であった事実」は、「社会の混乱をある意味で語っている。激変した世の状況と同じように、母の一家も平安を保てなかったのである」。「夫陳潤の死後、母は、外祖母によって、葬儀に関する厳格な教育を受けていた」。大暦四年（七六六）に母が十五歳で嫁いだ時、夫の白季庚はすでに四十一歳であった。「二人の結婚には、取り巻く時代の事情があったと思う。安史の乱が起り、……白氏の一家も生き残る路を探ったにちがいない。一家の安定を求めて、白氏の血を引く者同士の結果に至ったと考える」。

「白居易の母が仕えた祖父白鍾は、清廉で正直に生きた人」。「白氏の一家には、進士科及第者はいない」。「別駕になった季庚は、一族の出世頭」。「事状」に記された季庚の行動は、父の気質と似ていたことを彷彿とさせる。「白氏一家には家訓があった」。「白居易の母は、こうした白氏の家訓の中に生き、夫の季庚を助け、潁州県君に封ぜられた」。母の教育方針は、「学」と「正」であった。「学力のみならず、道徳面も重視していた」。

「母の死後の白居易の心情」は、下邳における改葬行為に表れている。「白居易は母を葬送する悲しみの中で、家族の墳墓を下邳に定め、近親者の墓を下邳に集めた。故人たちを追悼する文章を書き、彼らを改めて葬送した。こうして母を中心にして初めて死者たちの魂に安らぎを与えることができた」。「それは自分の故郷を確認し、自身にも安寧をもたらす行為であったと言いうことができるかもしれない」。

六の三 交友

柳川順子「元白交往詩初探——白居易「八月十五日夜、禁中独直、对月憶元九」詩を起点として」（中唐文学会報）二七、二〇・一〇

名作として知られる表題の詩を贈られた元稹は、これに「応酬した「酬乐天八月十五夜、禁中独直、玩月見寄」詩を見る限り」「少しくその心証を害した」らしい。その理由の解明を起点として、元和五年から元和十二年に至るまで、「二人の間に交錯した心情の一端を、その詩の読解を通して後付け」ようとするもの。構成は「はじめに／一／二／三／むすびに代えて」。

「むすびに代えて」にいう。「白居易が大明宮の中から江陵の元稹に書き送った二篇の詩、「禁中夜作書与元九」と「八月十五日夜、禁中独直、对月憶元九」とは、以上の検討を通して見る限り、いずれもその送り手の思いとは裏腹に、元稹の心情をひどく逆なでしてしまったようである。では、このことに白居易自身は気づいていな

かっただろうか。そうではあるまい。気づいていなければ、八年後の書簡の中に、「瞥然塵念」という語を刻み込むことはなかったはずだ。一方、これくらいのことでは崩壊する友情ではないと、彼は心の底から確信していたのでもなかったか。このことは、同時期に二人の間を往来した詩の数々が雄弁に物語るところである。その自信があればこそ、白居易は元稹の不機嫌を鷹揚に受けとめ、なおも相手への友情を保つことができたのではないか。先に示した元稹の「酬乐天書後三韻」詩は、そうした白居易の長年にわたる篤い思いに揺さぶられて出来たものだろう。その結びにいう涙には、二人の積年の友情が走馬灯のように映じていたに違いない。」

高橋良行「白居易の〈詠夢詩〉——〈夢〉中の友」(中国詩文論叢)三九、二〇・一二)

「白居易の多様な〈詠夢詩〉のうち、顕著な特徴となっている〈夢〉中の友」を描いた十三首と関連詩五首を取り上げ、先行作である杜甫の詩と比較しつつ、その表現上の特徴や白居易の〈友情詩〉に占める位相などについて、初歩的な考察を行」うもの。構成は「一 はじめに／二 先行作としての杜甫「夢李白二首」／三 〈夢〉中の元稹／四 〈夢〉中の裴珀・劉禹錫、その他の友人／五 〈夢〉中の白行簡／六 結語」。

「結語」にいう。「白居易以前に、友人を夢に見たことを詠じた詩はほとんどなく、杜甫の「夢李白二首」が実質的な先行作であり、発想の面からも用語・表現の面からも」「大きな影響を与えている」。「白居易の友を詠じた〈詠夢詩〉は、元和五年(三十九歳)から開成二年(六十六歳)の間に作られ、詩型的には五言古詩が多く」「内容的には、友と遊ぶものが多」い。「白居易の夢魂が友人のところに行くこともあるが、多くは白居易のなかに友人たちが現れている」。「生者が延べ十一名、死者が延べ七名となる」。「三名の友が同時に現れていることもある。これは白居易の〈詠夢詩〉の顕著な特徴である」。「これだけ多くの〈夢〉中の友を詠じた詩があるのは、生涯、友人を大切にし、その交わりを楽しんだ白居易の価値観や人生観の反映であり、こうした詩は〈詠夢詩〉であると同時に、白居易の〈友情詩〉ということもできよう。」

六の四 女性・恋愛

山崎藍「流れる汗・じむ汗——白居易における舞妓の汗描寫を中心に」(「白居易研究年報」二〇、二〇・九)

「先行研究の指摘を踏まえた上で「汗」の用例を再度検討し、先秦から唐代までの詩歌における汗描写、特に白詩における舞妓と汗について」見解を述べたもの。構成は「はじめに／一 隋までの作品——流れる汗からじむ汗へ——／二 唐の作品——様々な汗描写——／三 西方音楽の流行——白居易の樂舞詩と汗描写——／おわりに」。

以下のようにいう。「白居易にとって汗とは、激しい舞の動きから生じるものであり、西域よりもたらされた、妙齡の女性が扇情的に演じる柘枝の舞妓、ないし、官能的に踊る美しい舞姫を表現するための語だったのでないだろうか。」「唐代は、六朝期よりも汗を詠む作品が増え、舞妓のかく汗も描かれるようになった。」「とはいえ、全体的な舞妓詩における割合からみれば、舞妓の汗を描く作品は決して多くない。白詩の汗表現も例外では無く、柘枝舞に代表される、艶美な舞を描くの限定していた。妻や恋人、家妓といった身近な女性の、心の美しさや気立ての良さに汗描写を詠じなかったのは、白居易が「汗」という詩語がそのような女性には適切ではなかったと見なしたためであろう。白居易は汗を使って、薄手の衣装で煌びやかに踊る舞妓の艶姿、激しい動きから導かれる身体性を描写し、新たな表現を獲得しようとして試みたのである。」

六の五 特定の時期についての論考

周雲喬「致仕すべきや否や?——白居易の致仕に関する詩をめぐって」(「国際社会文化研究」二二、二〇・一二)

「高知大学を去る日が近づき」「白居易の「高僕射」及び「不致仕」という二つの詩を通して退官をめぐる大人

の事情を探つ」たもの。構成は「1. はじめに／一、致仕の年齢と老齢年金／二、高僕射の致仕／三、某高官の不致仕／三（ママ）、結び」。

『礼記・曲礼上』には「大夫は七十にして事を致す」と規定され、唐代でも「人生七十古来稀なり」（杜甫「曲江」詩）だった。「ほとんどの人は病気でない限りは死ぬまで働いていたはず」。白居易のように「七十歳の定年まで無事に勤めあげて、晴れて老齢年金を支給される幸福な人間はめったに居るものではなかった。」「七十にして致仕」するのは、人生の幸福ここに極まっていたはずである。」

「当時は高郢と杜佑の二人の老高官が居て、一方は七十で致仕し、一方は致仕しなかった」。高郢は「白居易と同じく非門閥貴族出身で、しかも科擧官僚として宰相にまで登りつめながら、礼の規定通りに引退した。」一方、「杜佑本人は極めて優秀有能な人材ではあった」が、「門閥貴族出身者の典型だった」。「科擧受験に苦勞することもなく恩蔭で官位につき、宰相に上りつめて七十を過ぎても「君恩」によって引退しなかった。また広大な屋敷で名士たちと宴会を楽しみ、息子たちもまた恩蔭で官位についていた。「不致仕」詩の「誰か富貴を愛さざる、誰か君恩を恋わざる」云々は、相当に露骨な杜佑への当てこすりだ」。

白居易が「不致仕……を一種の社会問題として諷諭詩を作った背景には、時代の大きな転換下での新旧両世代ないし階級の利害対立があった」。「この問題が尖鋭化してきたのは、やはり白居易の時代」だろう。「白居易の詩は、直接には二人の實在人物の致仕問題から出発しながら、時代の問題を象徴的に切り取った作品となっている」。「この問題は本質的に現代でもそのまま通用する」。「高郢のようにその時が至ればきれいに辞めるのが、後々あれこれ言われない秘訣であろう。そのことを肝に銘じて擱筆する。」

諸田龍美 「山の詩人」白居易（一）——生涯から三十四歳まで」（愛媛大学法文学部論集）五〇、二一・二二）

白居易には「自分は本来、山中の人であり、山寺の近くこそ心安まる故郷のごとき場所。いずれは、その故郷

（山寺の近く）へ帰るべきなのだ」という自覚があった。白居易が山とどのように関わり、いかにして山に帰ったのか、その足跡を丹念に辿り、「山の詩人としての真相」を浮き彫りにしようとするもの。考察は五回にわたる予定だが、本稿は、生誕から永貞元年、三十四歳までを対象とする。構成は「一 伝記考①生誕〜31歳／二山の詩①——漂泊期／三 伝記考②——32歳〜34歳／四山の詩②——帰山の計／五 小結」。

「小結」にいう。「本稿では、……校書郎期の白居易が「帰山」と「拔擢」という、相反する二つの願望を同時に抱いていたことが浮き彫りとなった。この二筋の道は、……分裂の危機を孕んだ道であろう。だが、当時の居易には、「帰山の道」は事実上閉ざされており、彼は「拔擢への道」を進むほかなかった。だとすれば、「帰山の願望」は、おのずから心底に押さえ込まれ、鬱積するほかはない。しかし「帰山」は、彼の本性に関わる願望なのである。その存在を無視し、抑圧することは、「自己を欺く」ことになる。そうした内面性における分裂の危険を抱えながら、居易は官途を歩み始めた。その二筋の道は、彼をどのような状況へ導くのか。稿を改めて考察したい。」

九 後世への影響についての研究

〔宋〕

湯淺陽子 「寄老庵によせて——ある北宋文人の閑居をめぐる詩文」（人文論叢…三重大学人文学部文化科学研究紀要）

三七、二〇・三三）

構成は「【要旨】／はじめに／一 孫覿について／二 寄老庵の造営／三 孫覿「頤之禪老許以草庵見処作詩以約之」詩・秦觀「再用韻」詩・釈道潜「次韵莘老贈頤之」詩／四 秦觀「寄老庵賦」／五 劉攽「寄老庵記」／六 黄庭堅「代莘老作寄老庵賦」／おわりに」。

CINIIの「抄録」にいう（本論の【要旨】と同文。「中唐期以降における科挙出身官僚の増加と社会的位置づけの高まりのなかで、白居易（七七一―八四六）らを初めとする人々によって、知識人の閑居のあるべき姿が模索され、それは閑居の場の造営やそれに関わる詩文での表現といった形で表出された。そのような模索は、さらにその後、北宋期の科挙出身者を中心とする文人官僚においても継承され、表出され続けたが、それぞれの世代において、その時々時代の背景とも関わりながらその発想を少しずつ変化させていったと思われる。本稿は、その生涯を通して、歐陽脩・蘇軾らの世代のみならず、さらに後の世代である黄庭堅をはじめとする所謂「蘇門四學士」とも強い繋がりをもちつづけた孫覺（一〇二八―一〇九〇）とその寄老庵を焦点とし、彼らを取り巻く人々のつながりを考える。孫覺は当時の多くの保守派の官僚達と同様に、若年期に胡瑗のもとで学び、進士科及第を経て中央ならびに地方の官職を歴任し、高位に至った。またその間には、史書の改訂作業に加わり、晩年には哲宗の侍講、知貢舉を担当するなど、当時においてその学識が高く評価されていた。孫覺は故郷の高郵で喪に服していた熙寧九年八月に烏江縣の温泉を訪ねているが、同行者であった秦觀が翌年に制作した「遊湯泉記」は、孫覺はこの旅の中で見つけた景色の良い場所に自分の引退後の閑居を設けることを決めたことと記している。孫覺が設けた庵の「寄老」という名は白居易詩の「寄老慵」を意識するものであり、この寄老庵には、孫覺、秦觀、釋道潛（參寥）、黄庭堅、劉攽がかなり長い時間を隔てて詩文を寄せている。孫覺が草庵設置の許可を得た際に作成した「顯之禪老許以草庵見處作詩以約之」詩、及びこの作品に対する秦觀「再用韻」詩・釋道潛「次韵莘老贈顯之」詩は、いずれも詩中で「寄老」に言及しないが、翌熙寧十年に秦觀が「游湯泉記」とともに制作した「寄老庵賦」は、失意の退隱であることを暗示しつつも、寄老庵で行われる閑居がいかに高遠な境地にあるかを『莊子』を踏まえて説明している。この時点での寄老庵は、孫覺が将来の隱退生活に備えるためのものであり、秦觀は将来の孫覺に予想される理想の閑居を描いている。その後の元豊五年に劉攽が寄せた「寄老庵記」は、蘇軾の烏臺詩案に連座

した罪を問われた処分から回復した頃に制作されたものであり、寄老庵を、政府内での緊張から逃れることのできる、将来の隱退生活のために賢明に準備された場所として描いている。またさらに六年後の元祐三年に、知貢舉であった孫覺の依頼により黄庭堅が代作した「寄老庵賦」は、「智」を用いず「愚」に帰り、「徳」を保つ存在こそ「斯文」を体現するものであるとする。元祐五年に亡くなった孫覺を悼む秦觀「孫莘老挽詞四首」其一是、彼の晩年は不遇だったのではなく、言葉を忘れる道家的な理想を表す境地を得たと述べるが、これは黄庭堅「寄老庵賦」の言う境地と似たものとなっており、秦觀・黄庭堅は孫覺の晩年に閑居の一つの理想的なあり方を見たのではないかと考えられる。」

【訳注】澤崎久和『晁迥『法藏碎金録』所収白居易関係資料訳注稿(4)』（白居易研究年報 二〇、二〇・九）

北宋・晁迥撰『法藏碎金録』十巻に収められる白居易詩文に関わる章段の訳注稿。前稿「晁迥『法藏碎金録』所収白居易関係資料訳注稿(一)」「同(二)」「同(三)」に続き、巻七〜巻十所収の章段の訳注を載せる。